



アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造： 異郷訪問譚によらない事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): アイヌ口承テキスト, 裏返し構造, 物語構造 キーワード (En): 作成者: 大喜多, 紀明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008876

アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造 —異郷訪問譚によらない事例—

大喜多 紀明

The Reversal Structure of Ainu Oral Texts : as Cases not Based on *Ikyo-houmon-tan*

Noriaki OHGITA

要旨：従来、裏返し構造は、異郷訪問譚に見いだされる構造とされてきた。本稿では、異郷訪問譚の形式ではないアイヌの口承文芸である「ボヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」をテキストとし、裏返し構造を援用する観点からの分析を行ったところ、これらは裏返し構造による構成であることが確認できた。異郷訪問譚の形式ではない物語に裏返し構造が見いだせた事例を示す報告としては本稿が最初のものである。

キーワード：アイヌ口承テキスト 裏返し構造 物語構造

1. はじめに

裏返し構造は物語の構造の一種である。ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップは、ルーマニアの昔話「兵士としての少女」の構造が、以下に示す構成からなることを見いだした¹。

「兵士としての少女」の構造

． 欠如：

． 虚偽：

． 試練：

¹昔話「兵士としての少女」に見いだされた構造は、1961年に、『Folclor Literar』誌におけるミハイ・ポップの論文「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」で最初に紹介された。ただし、この論文は日本での入手が困難だったため、該当部分が掲載された(Pop 1990: 77-92)を本稿では引用した。なお、本稿の図式はPop(1990)の図式に基づいているが、便宜上、語句を筆者による日本語訳に置換している。

- ・ 暴虐:
- ・ 暴虐の除去
- ・ 試練の除去
- ・ 虚偽の除去
- ・ 欠如の除去

「兵士としての少女」の物語の前半は、「欠如」・「虚偽」・「試練」・「暴虐」という一連の要素が配列している。一方、物語の後半は、前半に配列した要素の順番が逆転している。かつ、それぞれの要素は、後半では、前半の要素を除去する意味をもつものとなっている。

ポップの知見を受けた大林（1979：1）は、ポップが「兵士としての少女」に見いだした構造を以下のように見做した。そのうえで、日本の異郷訪問譚にあてはめた。

それによれば、この昔話はいわばその前半と後半とが裏返しの関係になっている。つまり、前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になっている。早く言えば、ポップの方法は、構造分析における syntagmatic な見方と、paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう。

大林が大林（1979）でポップのモデルを援用した物語は「イザナキの黄泉国訪問」・「神功征韓譚」・「浦島子」・「甲賀三郎」である²。これらの物語にはポップによる構造と同様の構造がみとめられた。さらに、大林（1979：8-9）は次のように述べた。

私は小論において、日本文学から口承文学にもとづくと思われる異郷訪問譚の例をとり上げ、そこには共通の約束があることを論じた。もちろん、これは日本の異郷訪問譚のごく一部にしか過ぎない。日本文学上の他の作品、また現在の昔話や伝説における異郷訪問譚にも、同様な構造がみられるかどうか、また異郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか、さらにこのような構造をもたない異郷訪問譚は、どのような構造をもっているのか、の検討は今後の課題である。

ポップが見いだした構造を大林は「裏返し構造」と呼び、これを、異郷訪問譚に見いだされる構造上の「共通の約束」と見做した。そのうえで、異郷訪問譚以外の形式を持つ物語にもこの構造がみられるか否かという点を今後の検討課題の一つとした（大林 1979：1-9）。

大林（1979）の知見を受け、本稿では、以下の A および B の特徴を持つ構造を裏返し構造と呼ぶこととする。

²これらはいずれも異郷訪問譚の形式を持つ物語である。

A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する³。

B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する⁴。

本稿では、浅井タケを話者とするアイヌ口承文芸「箱流しの話」・「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」と、知里真志保が採録したアイヌ口承文芸「飢餓魔」・「人食いおばけ」、貝沢こきんを話者とするアイヌ口承文芸「氷の上で」をテキストとしている。ここで、「箱流しの話」と「飢餓魔」は異郷訪問譚であるが、「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」は異郷訪問譚ではない⁵。

現在まで、日本⁶（大林 1979：1-9）や韓国（加藤 1979：83-90、依田 1982：47-57）の異郷訪問譚など⁷を対象として裏返し構造の使用が確認されてきたが、アイヌ民族の口承テキストに援用した先行研究はない。そこで、本稿ではまず、裏返し構造を、異郷訪問譚形式のアイヌ口承テキストに援用し、アイヌ口承の場合も日本や韓国の異郷訪問譚と同様に裏返し構造が使用されることを確認するための予備的な検証を行う。そのうえで、本稿では、異郷訪問譚の形式によらないアイヌ口承テキストをとりあげ、これに裏返し構造を見いだせるかどうかを確認することとする。異郷訪問譚によらない形式の物語に裏返し構造を見いだした先行研究は皆無であるので、本稿は、これを示した最初の報告である。

2. テキスト

本稿では、異郷訪問譚の形式に類別できるものとしては「箱流しの話」と「飢餓魔」を、異郷訪問譚に類別できないものとしては「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」をそれぞれテキストとした⁸。

「箱流しの話」・「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話 -89」は、アイヌ語樺太方言⁹の話者であ

³本稿ではこれを特徴 A とする。

⁴本稿ではこれを特徴 B とする。

⁵異郷訪問譚の形式を持つか否かに関する判別は、3 節で示した本稿での異郷訪問譚の定義に基づいている。

⁶ここで述べられている「日本」は、いわゆる「和人」を指しており、アイヌ民族は含んでいない。

⁷他に、大喜多（2014）や大喜多（2015）では、宮崎駿の長編アニメーション作品をテキストとしたうえで裏返し構造を援用している。ただし、大喜多（2014）ではテキストとした「千と千尋の神隠し」を異郷訪問譚としているが、大喜多（2015）では、テキストとした「風の谷のナウシカ」および「天空の城ラピュタ」と異郷訪問譚との関連には言及していない。

⁸本稿でとりあげた口承テキストのジャンルは、例えば、浅井によるものはトゥイタハ（樺太アイヌを話者とする散文説話のジャンルの一つ）であり、貝沢によるものはポンカムイユカラ（小さな神謡）であるが、本稿では、構造とジャンルとの関連については述べないこととする。筆者はこの点を今後検証すべきテーマと見做している。

⁹アイヌ語には、大きくは北海道方言・樺太方言・千島方言がある。なお、「アイヌ語樺太方

る浅井タケによる口承テキスト¹⁰である。「飢餓魔」と「人食いおばけ」は知里真志保が収録した『アイヌ民譚集 付、えぞおばけ列伝』(知里 1981)¹¹に掲載されたものを引用している。また、「氷の上で」は、アイヌ語北海道方言の話者である貝沢こきんによる口承の日本語訳テキスト(田村 1996: 48-51)に基づいている。

なお、一人の話者によるテキストのみに注目した場合、話者固有の特性¹²による影響が大きくなる可能性が生じる。本稿は、特定の話者の「語り癖」を調査するところに目的をおいていないので、複数の話者によるテキストをとりあげた。

以下、「箱流しの話」・「飢餓魔」・「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」の全文を引用転記する。それぞれのテキストに付された記号および数字は筆者によるものである。

2.1. 「箱流しの話」

本節では、「箱流しの話」を記載する。

(1/) サンヌピシ村に一人の男が妻と暮らしていた。一人の男が妻といて、暮らしているうちに、子供が生まれた。男の子が生まれた。男の子が生まれて育てた。育てているうちに、今もう大きい大人になったとさ。だけどまだあまり大きくなってまだ小さかったけれども、魚とりもよくできたし、マキとりもよくできたとさ。(1/)(2/) そうしてからある日、その男は魚をとっては食べ、マキをとってはたき、そうしているうちにある日、その男が出かけたあとでその娘はその夫にこう言ったとさ。

「ねえお前さん、箱を作っておくれ。あの子を中に入れて流すから。」と言ったとさ。(どうして流してやるの? Si) 流してやるって言うんだとさ。そうしたらこんど男が言った通りにこんど、箱をこしらえたんだとさ。板でこしらえたんだとさ。(アイヌ語で言ってください。M) 箱を作ったとさ。箱を作ってから男が山から下りて来たとさ。箱はアイヌ語でも同じだよ。sipoh は宝物を入れるものだよ。(2/)(3/) 箱を作ったら、男が山から下りてきたとさ。山から下りてきて父さんに聞いたとさ。「何の箱なの?」と言うと、「お前を遊ばせるために作ったんだよ。」と言ったとさ。それから箱を作ってしばらくして「ねえ坊や、中に入ってください。」と言ったとさ。そうして、小さい男がその箱の中に入ると、すぐ板で全部口を閉めて釘でふさいだ。(3/)(4/) ふさいでから、水の中に投げて流したとさ。そうして、ずっと今その男、女、男はすぐ川に沿って流れた。流

言」を「樺太アイヌ語」と称する場合もあるが、便宜上、本稿では「アイヌ語樺太方言」と呼ぶこととする。

¹⁰「箱流しの話」・「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話 -89」は、村崎恭子の『浅井タケ昔話全集 I, II』(http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html, 2012年1月5日閲覧)に掲載された資料のなかの、村崎による日本語訳の文字資料を使用した。なお、『浅井タケ昔話全集 I, II』は、樺太アイヌ語による音声資料・これをローマ字表記により文字化した資料・村崎による日本語訳の文字資料からなる。

¹¹この書籍に掲載された口承は知里真志保が採録したが、話者は明らかではない。

¹²いわゆる「語り癖」などがこれである。

れて、下って泣きながら下ったとさ。

ha'ii mahpa cooruntee
monimaa kurukaa cooruntee
ha'ii mahpa cooruntee
'ooyoo kante cooruntee
ha'ii mahpaa cooruntee
monimaa kuru kaa cooruntee
ha'ii mahpaa cooruntee

と言って泣きながら川を下ったとさ。それからどうなったのか分からなかったとさ。死んだのだから生きているのだから分からなかったとさ。(/4)(5/) そうしているうちに、こんど話は変わって、ある村に一人の娘がいたとさ。娘が一人いて、お裁縫や、マキとりをして、魚とりをしては食べ、ユリ根を掘っては食べ、お裁縫をしていたとさ。そうやっているうちにある日、お裁縫をしていたら無性に浜へ出たくなったとさ。浜へ出たいから、「どうしてこんなに浜へ行きたいんだろう？」と不思議に思ったけれども、浜辺へ下りて行くとさ。浜へ下りたら、そこに箱が一つ流れて来た。自分のうちのすぐ前に上がったとさ。それで箱のところに行きたかったので、そこへ行ってみた。ふたを開けたかったのでそれからふたを開けたとさ。開けたらその中に髪の毛ばかり入っていたとさ。髪の毛ばかり入っていて、その髪の毛を引き上げ引き上げして見ると、子どもの小指が半分その中にあったとさ。そうしてその半分の小指を今持ってうちへ帰ったとさ。(/5)(6/) それを晴れ着でくるんで子守をし、子守をし、そうして今見るとりっぱな美しい男の子になっていたとさ。そうして今美しい男の子になって育てていたら、(魂だべさ。Si) 育てて育てているうちに今大きくなったとさ。(/6)(7/) 大きくなって 今ある日、こう言ったとさ。「どこかに行ってみて、だれか男でもそこに行ってみて、だれかそこにいるかいはいか見に行ってみよう。」と言ったとさ。そうして今それから、出かけたとさ。ずっと行くと一本の道が山からずっと下がっていたとさ。その道をずっと山の方へ上っていくと一軒の家があったとさ。その戸を開けて入ったら、一人の男が妻と一緒にいたとさ。そしてそこに入って今みんな喜んで、「どこから来たお方ですか?」「私は遠い村から来た男だ。」と言ったとさ。そうしてユリ根をほって煮て食べさせみんなで食べた。しばらくして男が言ったとさ。「あの、歌を聞きたくありませんか。」とたずねたとさ。「歌が聞きたかったら、歌って聞かせますよ。」と言ったとさ。そうして今、歌を歌ったが、歌はいままで聞いたことがないと言った。「歌が聞きたいよ。」と二人は言ったとさ。そうして今その男はその間に座ったとさ。その娘と男の間にその子は座って、そこで歌を歌ったとさ。

ha'ii mahpa cooruntee
monimaa kurukaa cooruntee
hoyoo kante coruntee
ha'ii mahpaa cooruntee

monimaa kuru kaa cooruntee

ha'ii mahpaa cooruntee

monimaa kuru kaa cooruntee

「これはよい歌だ。」と二人は言ったとさ。(/7)(8/) そう言ってから今度は娘が言ったとさ。「あのね、お前の子どもじゃないか。」と言ったとさ。「男の子だから、本当にそうだよ。」と言ったとさ。(/8)(9/) それを聞いたとたん、その子は飛び出したとさ。その子が飛び起きたところを、その腹のところをつかもうと、腹をつかもうとしたら、その夫婦は互にくっついてしまったから、一人が「離してくれ!」、もう一人が「離してくれ!」、と声をあげた。(/9)(10/) 見ると、その子は逃げ出して、そこから、浜の方に下りて行って、うちへ帰った。娘もまた下りて行ったとさ。下りて行って、その娘が行った。また娘とそこで暮らしているうちに立派な男になって、その娘と夫婦になって、幸せに暮らしたとさ。そうしてからあの男、あの女はどうしているかと思ったので、ちょっと行ってみたいなと思ったので行ってみると、みんなそこは山になってしまっていたとさ。いろいろな木、あのう、エゾマツやマツやシラカバの木などの林になっていたとさ。そうして見てから、帰ってすぐ妻に話したとさ。「お前が私を生き返らせてくれたから、仇をとってきたよ。」

と言ったとさ。「お前が子守をしてくれて、それからあの男と女から逃げてきて、その後あそこは林になってしまった。」

と話をしたとさ。そういう昔話だ。こんなのがあった。(/10)

2.2. 「飢餓魔」

本節では「飢餓魔」の全文を記載する。

(1/) ヤイレスポとポニポニクフは、毎年、木幣の貢物を俺にささげて、俺を敬ってくれたので、季節季節の食物を豊かに恵んでやっていた。

今年は、どうしたわけか、漁の季節に入ってもう二ヵ月にもなるのに、まったく漁がない。いくら待っても、魚群はまったく姿を見せなかった。そこで、俺は、その原因をさぐるために、糸編みの敷物をたたんで奥にしまいこみ、窓をしめ、戸を紐で縛って、山手の木原を越え、浜手の木原を越え、山を下って里へ来た。

見れば、あたりの景色の美しさ。草原が矢の行くように打続き、その向うに、砂原が矢の行くようにずっと続いている。海上には、黄金の美しい小鳥どもが、水に潜り、また浮び上る。その音のたのしさ。

しばしこの景色に見とれていたが、ふとヤイレスポの家を眺めると、天窓から煙が出ていない。ポニポニクフの家の天窓のあたりにも、煙はなかった。(/1)

(2/) 不思議に思って、ヤイレスポの家の戸を開けて、中を見たが、人影がない。ポニポニクフの家の戸を開けて見たが、やはり人影が無かった。

外へ出て、あちらこちら見廻すと、沖の方を大きな船が行く。船の中にはヤイレスポと、ポニポニクフと、その部下たちの死体が、舳先に積みあげられ、艀に積みあげられ

てあった。(/2)

(3/)そこで、俺は、草原の小鳥に身を変じて、浜手の木原に飛び行き、赤いトリカブトの根を掘って胸に抱き、山手の木原に飛んで行って、白いトリカブトの根を掘って、背負って、丘を飛び越え、砂浜を飛び越え、魔の船を追った。(/3)

(4/) 昼六日、夜六日、魔の船を追って、魔の国へ着いた。
魔物は、家来を指揮して、ヤイレスポとその部下の死体を、舟からあげて、浜手の砂山、山手の砂山を越えて、家の下へ運び入れた。(/4)

(5/)俺は横窓から家の中を覗いた。魔物の妻がこういって訊ねた。
「この人間の肉は、新しいのを炊きませんか？」(/5)
(6/)すると魔物が反対した。
「古い肉の方がいい。新しい人間の肉は、海に疲れ、船に疲れたときには、悪いものだ」
(/6)

(7/)そこで魔物の妻は、六つの耳のついた大鍋に水を入れ、火にかけた。そして古い人肉を大片に切って煮た。(/7)

(8/)俺はそのとき窓から入って、まず、赤いトリカブトの根を小刀で細かく刻んで、鍋に入れた。赤い泡が炉ぶちにこぼれた。次いで、白いトリカブトの根を鍋の上で切り刻んだ。

肉が煮えたので、魔物の妻は、鍋をとりおろして、木の椀に入れて一同の者に食べさせた。

この肉汁を吸った者は、たちまち死んだ。肉を切って食べたものも、たちどころに死んだ。(/8)

(9/)俺は、そこで、魔物の船を出して、ヤイレスポとポニボニクフと、その部下の死体を運び入れ、魔の家財のうち、悪いものは破棄し、よいものは船に積んだ。魔物の家は灰に焼いてしまった。

魔物の船はヤイレスポの国へ着いた。死体を家の中へ運び入れて、二つの手草を作り、それで死体を祓って、彼らを蘇生させた。(/9)

(10/)ヤイレスポとポニボニクフは、たいへん俺に感謝して、夥しい木幣の荷、食物の荷を、俺に捧げた。俺は安心して、自分の家に帰って、彼らを見守っている。彼らは、海狩に出ても、山狩に出ても、幸運に恵まれた。(/10)

2.3. 「ポヌンカヨ-88」

本節では「ポヌンカヨ-88」を記載する。

(1/)(続けてください。Ko)

(言ってください。M)

3人の娘がいた。3人の娘がいて、その、マキをとってはくべ、魚をとっては食べ、ユリ根をほっては食べしていたが、そのうち、ある日に、山に行って、2人の娘がマキをとった。

末娘が家にいて、そうして、娘たちが山に行ってマキをとっていたら、子どもが一人いたとさ。一人の男の子に出会ったとさ。

こうしてこんど木のゆりかごに縛られた子どもに会って、それを抱いて、それから下りて来たら、あの末娘が家にいて、何とかか何とか言って、(アイヌ語で言ってください。M) 何とか、か何とか、言いながら帰って来たとさ、山から。

帰ってきたら、末娘を見ると、木に縛られた子どもを抱いて下りて来たとさ、山から。それから皆で喜んで、その子を育ててあやしたんだが、

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh

と言ってあやしながら躍らせた。(/1)

(2/) こうしていたが、またある日、マキとりに行ったとさ。こんどは中の娘と上の娘が留守番をした。上の娘と小さい娘がマキとりに行った。その、中の娘が留守番をした。子どもと留守番をして、おしめをとり替えて、そのように世話をしながら、そのゆりかごに縛られて置いて、そのまま便所に出たとさ。

出た後でしばらくして、家の中から何か物音がしたとさ。だから、戸口に沿ってその間から中をのぞいたら、小さい子どもだと思ったものが大男になっていたとさ。

「どれどれ、この家の娘たちは何を食べているんだろう？ 何を食べているんだろう？」と言ったとさ。

「小さい子どもだと思って（娘たちが）拾って連れて来たんだ。おれはその肉が食いたくて木の根元にいたんだが、娘たちは喜んで帰ってきた。」

と言いながら、鍋に入れるために、茶碗でもひしゃくでも、端をむしっては口の中に入れ、入れしている中に、娘はそれを見ていたが、勇気を出して戸を開けたら、すやすやとまた寝ていたとさ。

そうして今、夕方になって、姉さんたちが帰ってきて山であった出来事を話したが、中の娘は姉さんたちの言うことを疑ったとさ。

「小さい子だって？」

と言ったとさ。疑った。

それから次の日、下の方の娘と、末娘、中の娘とがマキとりに行った。姉が留守番をした。それから、姉さんは洗濯をして、おしめもと替えて、それからゆりかごに寝かせて、そこで寝て、便所に行った。

便所に行って、また用を足して入って、また行ってみたら、家の中から何か物音がしたとさ。

それで、戸の間から見たら、その実際はその子どもが、静かにゆっくりと家の中を歩いていたとさ。お椀を見つけては端をむしる、口に入れる、ひしゃくを見つけては端をむしる口に入れる、という風にしたとさ。

それからこんど、娘がそれを見て、勇気を出して入って見たこと一部始終を、一方姉さ

んたちが帰ってきて、話したとさ。皆で話し合って、今みんな本当だと思ったとさ。(/2)

(3/) それで、火を焚く者は火を焚いた。マキをとる者はマキをとった。それから次の日、言葉を掛けて、マキをとる者はマキをとり、火を焚く者は火を焚き、こうしていたが、支度してその後で、その子を火の中に投げて、逃げようと話し合ったとさ。

それで、その次の日、中の娘と末の娘がマキとりに行った。上の娘は留守番して火を焚いた。それからマキをとってから、家に入って、こんどその子を抱き上げてあやした。

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh

ponunkayoh ponunkayoh

と言ってあやして、

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh

ponunkayoh ponunkayoh

と言ってあやしてから、火の中に投げ入れて、放って、逃げて行ったとさ。火の中に投げ入れて、放って、逃げて行っただが、逃げてしばらくして見ると、後から何者が追いかけて来たのだった。(/3)

(4/) それから、その上の姉がその櫛を後の方に投げて、大きい雑木林を作った。それからまたしばらく逃げてから見ると、また林を抜けて来るのだった。

それで中の姉が玉を投げた。それが大きな林を作った。そうしてまた逃げた。しばらく逃げて後ろを見るとまたそのポヌンカヨが追って来るんだとさ。(/4) (5/) それからイチバン小サイ妹〔原文ママ〕¹³がその櫛をそれに投げた。投げて大きい川をつくったとさ。川をつくって逃げて逃げて後ろを見ると、それがまだやって来るんだとさ。(/5) (6/) そうして来てしばらくして、(一人でやって来たんだろう) と一人のババがそこで魚を釣っていたとさ。

「ねえ、おばあさん、私たちを渡して、渡してちょうだい。お化けの男が追いかけてくるの。渡して、渡して下さい。」

と言ったとさ。

それからそのババは足を伸ばしてくれて、その上を通って川を渡ったとさ。それからかくれた。ババは知らんふりして魚を釣っていたとさ。

魚を釣っていてふと見ると、本当に言った通りに、娘たちが言った通りに、そのお化けの男がやって来るのだった。

やって来て、ババに、

「ねえ、ばあさんや、オレを渡してくれ、渡してくれ。」

と言ったとさ。

それでババは渡してやった。お化けを渡してやるために足を伸ばした。

¹³この箇所は、話者である浅井が日本語で話した箇所である。日本語訳テキストを著した村崎はこれをカタカナで表記した。

「その深いとこ、深いとこ、足元に気をつけて渡りなさい。」

と言ったとさ。深いとこ、深いとこ、足元に気をつけて渡ったら、その川の真中を渡る
とき

「あ、あれ、おれの足が！」

と言って、川の中に足を引っぱられたものだから、お化けは水の中に入ってしまったと
さ。

それからこう言ったとさ。

ruru kuu cikh ruu kuu

ruru kuu cikh ruu kuu

と言ったら、川の水はみんな干上がったとさ。(/6) (7 /) それでそのババは、

rure 'atu cikh ruu 'atu

rure 'atu cikh ruu 'atu

そうしたら、川水が深くなって、すっかり深くなって、岸を廻ってお化けは流されて流
されて、腹の上に木の枝が刺さって腹が裂けて、それからそこからいろんな虫、カナヘ
ビやカエルなどの虫が腹から出て死んでしまったとさ。川で。(/7)

(8 /) おかげで、おかげ様で、娘やババたちは良かった良かったと話合っていたが、
そのそばに、とった魚などもお供えしたり山でとった山菜もお供えしたり、そうしてい
る中に娘たちは家へ帰って、家のこともちゃんと整えてそれからみんな(幸せに)暮ら
したとさ。(/8)

こんな昔話だ。

2.4. 「いびきの話-89」

以下、「いびきの話-89」を示す。

(1 /) (もう良いわ。いいわ。M)

一人のババが一人の娘を育てていたとさ。(はい。M)

娘を一人育てて、ユリ根を取っては食べ、マキをとってはくべしていたがいま、その娘
は大きくなったとさ。

それでこんどいたが、今寝たのだが夜寝たときババがいびきをかいたとさ。(いびきを
かいたとさ。M)

いびきをかいたが、

cireske moromahpo

kamihi ci'ee rusuy naa

unta pii pi unta pii po

hankoro roo

こう、いびきをかいたとさ。(アイヌ語で言って。M)

いびきをかいたからその娘はババを揺り起こした。

「ババ、何を言ってるの？」

「わしが何と言ったか？何も言わなかったよ。」

と言った。それで、「自分が育てた娘の肉が食いたいよ。」

と言ってたよ。いびきをかいていたよと言った。

あれは寝ていたお化けがそう言ったから自分もそう言ったんだ、とババは言った。「寝ていたお化けを起こすためにこう言ったんだ」

とババが言ったとさ。

だけれどまた、ある夜、また寝たときいびきをかいて、また、

kureske moromahpo

kamihi ci'ee rusuy kusu

unta pii pi unta pii po

hankoro roo

またババを揺り起こした。娘は、

「ねえ、おばあさん、何と言ったの？何を言ったの？」

「何も言っていないよ。」

すると、「わしが育てた娘の肉を食いたいよ unta pii pi unta pii po ungoro roo」といびきをかいてた、と言ったとさ。

ババは一人でぶつぶつ文句を言ったとさ。一人で、寝てたお化けがそう言ったんで自分は何も言わなかったよ。

こう言って、また夜また同じことをしたとさ。(/1)

(2 /) こうしているうちに、ある夜、ある日、男のキセルの音がしたから娘が戸を開けてみたら、男が一人外に立っていたとさ。

男が外にいて、それから中に入って、敷物のゴザを敷いてそれから男が入って、娘が用意した寝床の上に来て座ったとさ。(/2)

(3 /) ババはこの男を見て喜んで、飲ませたり、食べさせたりしてご馳走したが、夜になって今男は寝た。寝床を、その男の寝床を娘は sanketa pohka に作ったとさ。

寝床を作ってその男をそこに寝かした。娘は自分も寝た。ババもあれこれかたづけてあれこれやって寝た。(/3)

(4 /) それでしばらくしてババはまたいびきをかいて、それを、男が聞いていたとさ。

cireske moromahpo

kamihi ci'ee rusuy naa

unta pii pi unta pii po

hankoro roo

といびきをかいたとさ。

それでその娘はまた、ババに声を掛けた。

「ババ、何を言ってるの？ねえ、おばあさん、何言ってるの？」

すると、「寝ていたお化けが色々なことをするって、文句言ったんだよ、一人で」それからこんど声が途切れて寝てしまった。(/4)

(5/) またこういったとさ。

cireske moromahpo

kamihi ci'ee rusuy naa

unta pii pi unta pii po

hankoro roo

と言った。

それからその娘が起きようとしたとき男が娘を押さえた。また起きようとしたら押さえた。(/5)(6/) そうやってから男も起きて娘といっしょに起きて娘といっしょに起きていっしょに出発したとさ。(/6)

(7/) 2 人が出発して、外に出たら、ババも外に出て、何か叫んだとさ。(/7)

(8/) 「あのなあ、夕べうちに泊った男が娘を連れて逃げようとしてる。下りてきて助けてくれよ。」と言ったら

見ると山の方からウンカヨお化けたちがいっぱい下りて来たとさ。

ウンカヨお化けたちがいっぱい下りてきて、ババを捕まえて、足を引っ張る、手を引っ張る、のどを引っ張るなどして殺してしまって、それからみんな殺してしまって肉を料理して火を焚いて煮たとさ。

見ると、それから男は逃げたとさ。娘といっしょに。逃げて、男の村に娘はいっしょに行って、それからご馳走を作った。

聞くとところによると、そのババを、切って、煮て食べてみんな死んでしまったとさ。こう言う話をみんな話して聞いたとさ。

自分たちで共食いしてみんな死んでしまった。そういう話だ。

(ふうん。それで終わったの？ M)(/8)

2.5. 「人食いおばけ」

本節では「人食いおばけ」を示す。

(1/) 私はウラシベツの村に姉さんと二人で暮っていた。姉さんは神さまのように美しい人だった。そして、自分から言うのもなんだが、私も負けないくらいの美人だった。

ある日、姉さんとふたりで、囲炉裏を中にはさんで針仕事をしながら、四方山嘯をしていると、(/1)(2/) もう日も暮れようとする頃、戸外に人の歩く足音がして、誰か咳ばらいをしながら入って来た。見ると恐しく背の低い、色の黒い、みっともない顔の男で、私のうしろを通して横座にどっかと腰をおろし、そのまま何を言うでもなく、何をするでもなく、私たちの上をじろじろ見ながら大あぐらをかいて坐っているのだった。姉さんも私も知らんふりをしていた。

やがて日も暮れたので、姉さんが立って夜食のしたくをととのえ、私のお膳を私の前にすえ、自分のは自分の前において、どこから捜し出してきたのか、ぶっ欠けお椀の底にちょっぴり食物を入れて、小男の前におしやった。(/2)

(3/) 私たちがせっせと食べていると、小男は私たちの健啖ぶりを呆れ顔に眺めていたが、やがて言うことには、

「こら女ども、見ているとお前らの上の口は、恐しく食いしん坊のようだが、下の口の口はどうなんだい？」(/3)

(4/) すると、よもや姉さんがそんな返答をしようとは思わなかったのに、
「ええ、ええ、下の口だって食べますよ。でも普通の食物じゃ満足しないんです。私たちの下の口の食べものは人間、それも生きた男の人ばかり……。背の高い男の人なら、呑めば足だけ外へ残るけど、背の低い男の人なら、丸呑みにしてしまうんですよ」(/4)

(5/) それを聞くやいなや、小男はいきなり立ちあがって、あわてて戸外へ飛びだし、どこかへ消えてしまった。(/5)

(6/) そのあとで、姉さんは腹を抱えて大笑いをしながら、言うことには、
「これ妹、よくお聞き。私は小さい時から巫力にたけていて、偉い神さまでも偉くない神さまでも、魔物たちでも、どこで何をしているか、いながらにしてよく分るのです。この人間の国の背後の山の中に、カワウソの魔が兄弟二人で住んでいて、神々の中にも気に入るような娘が見つからないので、人間の国を見わたすと、私たち二人の美貌が目にとまったのです。そこで私たちを殺して魂を奪って妻にしようと、神々の目を盗んで山を降り、兄の方は村の背後に隠れて、弟だけここへ来たのです。ところが私があんなことを言ったものだから、魂が転げ落ちるほどびっくりして、兄の隠れている所へ息せき切って駆けつけ、

“人間の女どもが普通の食物を食うなら、痛くもかゆくもないが、男を食うんだそう。しかも背の低い男だと、丸呑みにしてしまうというから、俺たちなんかは丸呑みの範疇に属するわけだ”

と復命すると、兄もびっくり仰天して、

“そいつは陰呑な話だ。危なくメノコの下の口に丸呑みにされるところだったわい”

と言って、二人で逃げてしまったのです。魔などというものは他愛もないもので、諺にもあるとおり、言われたことをそのまま信じこむものだから、私たちの下の口が生きた男の人を食うなどという、とんでもないでたらめにだまされて、今はもう遠い遠い所へ逃げてしまったから、これからは何の怖いこともありません」

と姉さんの言うのを聞いて、私は驚いたり呆れたりしたのだった。

——と、ウラシベツ村の若い酋長夫人が物語った。(/6)

2.6. 「氷の上で」

本節では「氷の上で」を示す。

(1/) 氷の上に小さなオオカミがころがった
氷が偉いからだろうよ (/1)

(2/) 氷が偉いのに太陽に溶かされる
太陽が偉いからだろうよ (/2)
(3/) 太陽が偉いのにその上を雲が通る
雲が偉いからだろうよ (/3)
(4/) 雲が偉いのにそこから雨が落ちる
雨が偉いからだろうよ (/4)
(5/) 雨が偉いのに土の上に落ちる
土が偉いからだろうよ (/5)
(6/) 土が偉いのにその上に木が生えるの
木が偉いからだろうよ (/6)
(7/) 木が偉いのにアイヌに伐られる
アイヌが偉いからだろうよ (/7)
(8/) アイヌが偉いのに死んでしまうの
アイヌが死んだら
フッサフッサと息をかけると
いいものだ
生き返るものだ (/8)

3. 異郷訪問譚

本節ではまず、本稿における異郷訪問譚の定義を示すこととする。勝俣は異郷訪問譚の特徴を以下のように述べた (勝俣 2009 : 1)。

異郷訪問譚とは、現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である。訪問者は神¹⁴か人間であり、異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる。また、多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることは出来ない。

この記述に基づき、以下の から のすべてにあてはまる場合、本稿ではこれを異郷訪問譚とする。

異郷訪問譚は、訪問者が訪問者にとっての異郷を訪問する形式の物語である。

訪問者は「カミ」か「人間」である。

訪問者は、特殊な方法・手段により、異郷を訪問する。

選ばれた者しか異郷を訪問できない。

なお本稿では、上述の から を「異郷訪問譚の特徴」と呼び、それぞれを「特徴」な

¹⁴本稿では、勝俣が言う「神」を「カミ」と表記する。

いし「特徴」と呼ぶ。

大林（1979）でとりあげられた異郷訪問譚の一つである「イザナキの黄泉国訪問」を異郷訪問譚の特徴と照合した場合、次のようになる。

特徴：訪問者はイザナキである。イザナキは、イザナキにとっての異郷である黄泉の国に赴く。

特徴：イザナキは「カミ」である。

特徴：イザナキは、通常では侵入することができない黄泉の国へと訪れる。つまりこれは特殊な手段による異郷への訪問である。

特徴：イザナキによる黄泉の国への訪問は、イザナキが、死んだイザナミに会うことを切望したことによる。また、この行為はイザナキのみに可能なことであった。つまり、イザナキによる訪問は「選ばれた者」による訪問にあたる。

以上より、「イザナキの黄泉国訪問」は、異郷訪問譚の特徴を満たしているので、本稿で言うところの異郷訪問譚である。

続いて、2節で示したテキストが、はたして特徴～を満たすか否かを確認する。それにより、それぞれのテキストが本稿で言うところの異郷訪問譚かどうかを判別することとする。

3.1. 「箱流しの話」

本節では「箱流しの話」を異郷訪問譚の特徴と照合する。

特徴：主人公は、川下の家へと流され、そこで成長を遂げる。この川下の家は、主人公にとっての異郷である。

特徴：訪問者は「人間」である。

特徴：主人公は、箱に入れられて川に流されるという特殊な手段で異郷を訪問する。

特徴：主人公は箱に入れられて川に流された。これだけでも、普通は死んでもおかしくないのだが、娘が、娘自身も不思議に思うほど「浜へ行きたい」という気持ちに駆られて浜へ行った結果、箱が発見される。さらに娘は「箱を開けたい」という気持ちに駆られて箱を開ける。その結果、中にいた主人公は発見される。その際、主人公は髪の毛と小指の半分になっていた。そのような状態であるにもかかわらず、娘は主人公を育てたのである。つまり、主人公は、「偶然」が重なることで生き残った「選ばれた者」である。

以上より、「箱流しの話」は、特徴から のすべてにあてはまるので、異郷訪問譚である。

3.2. 「飢餓魔」

本節では「飢餓魔」を異郷訪問譚の特徴と照合する。

特徴 : 「飢餓魔」の主人公は鯨の神¹⁵である。鯨の神は、魔の船を追い、魔の国へと訪問する。鯨の神にとり、魔の国は異郷である。

特徴 : 鯨の神はカムイであるので、「カミ」と見做せる。

特徴 : 鯨の神は小鳥に身を変じることにより魔の国に赴く。これは特殊な手段にあたる。

特徴 : 鯨の神は、魔の船を発見し、それを追いかけた。その目的は、ヤイレスポとポニポニクフを助けることにある。これは、鯨の神は自分が行うべきことと自覚しての行動であると思われる。したがって、鯨の神は「選ばれた者」に相当する。

以上より、「飢餓魔」は特徴 ~ を満たすので異郷訪問譚である。

3.3. 「ポヌンカヨ-88」

本節では「ポヌンカヨ-88」の場合を示す。

特徴 : 主人公は、三人の娘である。物語には、娘たちがマキをとりに山を訪れる場面はあるものの、山への訪問は娘たちの日常の一部であるのでこれは異郷への訪問ではない。また、主人公が「お化け」から逃げる場面があるものの、これも異郷への訪問ではない。物語の主要な舞台は娘たちの家である。したがって、この物語では、娘たちは異郷へは訪問しない。むしろこの物語は、異界の住人（ここでは「お化け」）が主人公の日常に來訪する物語である。

特徴 : 特徴 で示したように、主人公は異郷への訪問者ではないので、訪問者が「カミ」もしくは「人間」であるという特徴はこの物語ではあてはまらない。

特徴 : この物語には、主人公が特殊な方法・手段により異郷を訪問する場面はない。

特徴 : そもそも主人公は異郷を訪問しないので、「選ばれた者しか異郷を訪問できない」という特徴はあてはまらない。

以上より、「ポヌンカヨ-88」の場合、特徴 ~ のすべてにあてはまらないので異郷訪問譚ではない。

3.4. 「いびきの話-89」

続いて「いびきの話-89」の場合である。

特徴 : 主人公は娘である。娘は「ウンカヨ」(お化け)と家で生活をしており、異郷へは訪問しない。むしろこの物語では、異界の住人である「ウンカヨ」が主人公の家に來訪している。

特徴 : 主人公は訪問者ではない。したがって、訪問者が「カミ」もしくは「人間」であ

¹⁵ 『アイヌ民譚集 付、えぞおばけ列伝』に書かれた「飢餓魔」に関する知里の注釈には次のようにある。「この物語ではどういう神が物語っているのか直接には示されていない。しかし、ヤイレスポの守り神だということで、鯨の神の自叙だなということが察しられる。」ここでは、知里の注釈にしたがい、「飢餓魔」の主人公を「鯨の神」とする。

るという特徴をこの物語にあてはめることはできない。

特徴 : 主人公が特殊な方法・手段により異郷へ訪問する様子は、この物語には描かれていない。

特徴 : 主人公が異郷を訪問するという前提がないため、「選ばれた者しか異郷を訪問できない」という特徴はあてはまらない。

したがって、特徴 ~ のすべてにあてはまらないので、「いびきの話-89」は異郷訪問譚ではない。

3.5. 「人食いおばけ」

本節では「人食いおばけ」について照合する。

特徴 : 「人食いおばけ」の主人公は姉妹である。この姉妹は、終始家から外出しないので、異郷へも訪問しない。逆に、この物語では、「カワウソの魔」が主人公宅に来訪している。

特徴 : この物語には、主人公が異郷を訪問するという前提がないので、訪問者が「カミ」もしくは「人間」とであるという特徴はこの物語には該当しない。

特徴 : 主人公が訪問しないため、特殊な方法・手段による異郷への訪問は、この物語には描かれていない。

特徴 : そもそも主人公は異郷を訪問しないので、「選ばれた者しか異郷を訪問できない」という特徴はあてはまらない。

以上より、「人食いおばけ」は特徴 ~ にあてはまらない。したがってこれは異郷訪問譚ではない。

3.6. 「氷の上で」

「氷の上で」についてである。

特徴 : 「氷の上で」では、「オオカミ」・「氷」・「太陽」・「雲」・「雨」・「土」・「木」・「アイヌ」¹⁶が順に描かれており、物語の主人公と呼べるものは登場しない。したがって、主人公による異郷への訪問はない。

特徴 : この物語には、主人公が存在しないので訪問者もない。したがって、訪問者が「カミ」もしくは「人間」とであるという特徴はこの物語にはあてはまらない。

特徴 : 主人公が存在しないので、主人公による特殊な方法・手段による異郷への訪問もない。

特徴 : 同様に、主人公が存在しないため、「選ばれた者しか異郷を訪問できない」という特徴はあてはまらない。

¹⁶これは「人間」の意味である。

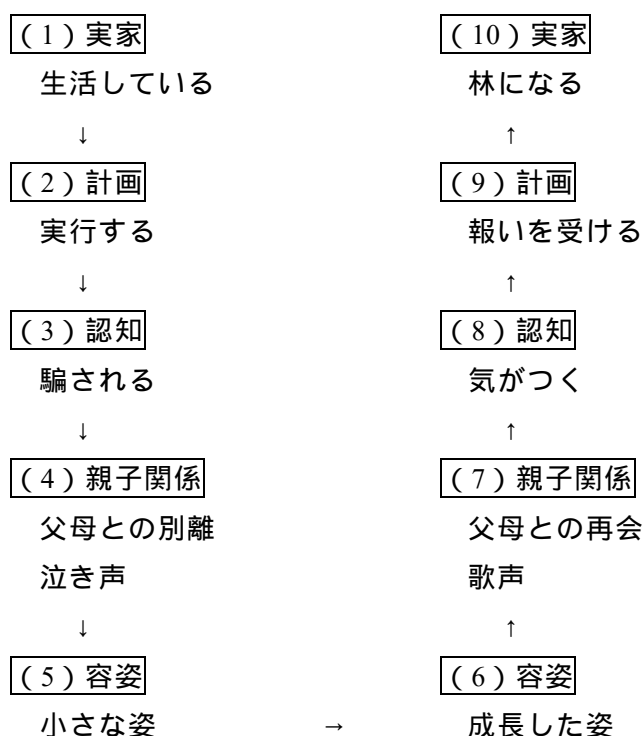
このように、「氷の上で」は、特徴 ~ のすべてがあてはまらない。したがってこれは異郷訪問譚ではない。

4. 裏返し構造

3 節では、「箱流しの話」・「飢餓魔」は異郷訪問譚であるが、「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」は異郷訪問譚ではないことを、本稿の異郷訪問譚の特徴に照合して述べた。これを踏まえ、本節ではそれぞれのテキストに対し、裏返し構造を援用する視点からの分析を行うこととする。なお、本節の分析は、2 節でそれぞれのテキストに付した記号・数字¹⁷に基づいている。

4.1. 「箱流しの話」

本節では、2.1.節のテキストに付した記号・数字に基づき、図式を編成する。



「箱流しの話」は、(1) から (10) の断章からなり、(1) から (10) へとストーリーは進行する。これは、大林 (1979) が言うところの syntagmatic¹⁸な見方によるものである。

一方、大林 (1979) が言うところの paradigmatic¹⁹な見方によれば以下の通りである。まず、(1) には、主人公が実家で育つ様子が描かれている。それに対する (10) には、主人公は結

¹⁷例えば、テキストに付した (1/) と (/1) で挟まれた範囲を (1) であらわすこととする。他の数字についても同様である。

¹⁸便宜上、本稿ではこれを「統辞的」と呼ぶ。

¹⁹便宜上、本稿ではこれを「系列的」と呼ぶ。

婚し幸せに生活するとともに、実家の父母はいなくなり、実家があった場所は林と化している。この箇所、実家が「有る様子」と「無い様子」は対照的な関係である。

(2) には、主人公の父母が主人公を川に流す準備をしている様子が書かれている。一方、(9) では、(2) で計画した悪事を実行したことによる報いを、主人公の父母が受けている。ここでは、父母による悪事の「事前の準備」と「事後の報い」とが対照的に配置されている。

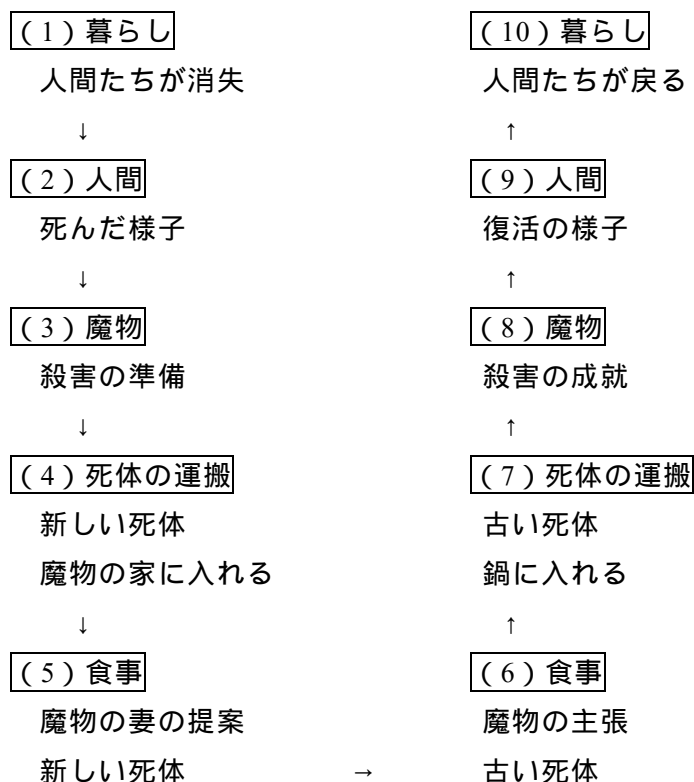
(3) においては、主人公が父母に騙され、箱に閉じ込められる様子が描かれている。それに対して、(8) には、故郷に戻った主人公が、目の前にいる人が自分の実の父母であることに気付く。この箇所では、主人公が認知できているかどうか、つまり、「騙されること」と「気付くこと」が対照的な関係である。

(4) には、主人公が願わないなかでの親子の離別の様子が描かれている。その際、主人公は、悲しい泣き声を放っている。一方、(7) では、主人公は父母と再会しているが、親子ともにそれを気付いていない。その際、主人公は歌を歌い、その歌声を父母は喜んでいる。ここでは、父母との「別離」と「再会」、「悲しい泣き声」と「よい歌声」が対照的対応である。

(5) に描かれた主人公は、髪の毛と小指の半分という状態である。それに対する(6)での主人公の姿は、成長した美しい男の子の姿である。双方に描かれた主人公の姿は、大きさという観点では、「小さな姿」と「成長した姿」というように対照的である。

4.2. 「飢餓魔」

本節では、2.2.節のテキスト「飢餓魔」に付された記号・数字にしたがい、これを図式化する。



「飢餓魔」は(1)から(10)の断章からなる。統辞的視点によれば、この物語のストーリーは(1)から(10)へ進行する。

一方、系列的な視点によれば、この物語は次のようになる。(1)には、毎年、ヤイレスポやポニボニクフが鯨の神を敬っていたのにもかかわらず、今年は貢物もないので変に思った様子が描かれている。一方、(10)には、ヤイレスポ・ポニボニクフが戻り、鯨の神を敬う元の生活が描かれている。

(2)には、鯨の神がヤイレスポとポニボニクフらの死体を発見する場面が描かれている。それに対して、(9)では、上述の人間たちが生き返っている。

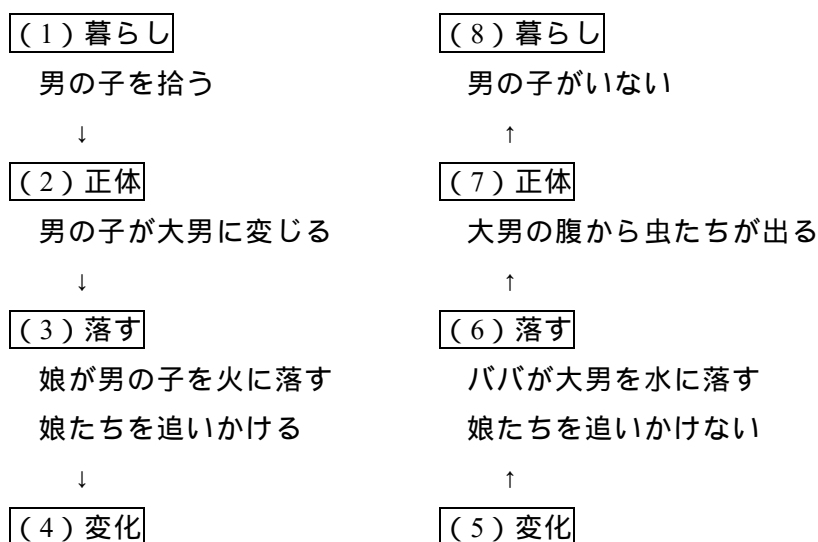
(3)には、鯨の神が小鳥の姿に身を転じ、トリカブトを持って、魔の船を追いかける。このトリカブトは、魔物を殺害するために使用される。一方、(8)には、このトリカブトで魔物を殺害の様子が描かれている。つまり、(3)は「殺害の準備」であり、(8)は「殺害の成就」である。この場合、(3)は、物事が未だ現実化していない状態であるのに対して(8)は現実化した状態であるので、双方は対照的である。

(4)は、魔物がヤイレスポらの死体(新しい死体)を家の下に運び込む場面である。それに対し、(7)は、刻まれた人肉(古い死体)が鍋に入れられる場面である。ここでは、新しい死体と古い死体、家と鍋²⁰が対照的に対応している。

(5)では、魔物の妻は、新しい人肉を炊くべきかを魔物に訪ねている。一方(6)では、魔物は、古い人肉を炊くべきと主張している。つまりここでは、「魔物の妻の提案」と「魔物の主張」、「新しい死体」と「古い死体」が対照的に描かれている。

4.3. 「ポヌンカヨ-88」

以下、2.3.節のテキスト「ポヌンカヨ-88」に付した記号・数字に基づき図式化する。



²⁰「家」と「鍋」は、共に。何かしらを入れる目的で使用されるが、容量には大きな違いがある。古い人肉が刻まれて投入された「鍋」は、魔物が住む「家」に比べると、その容量は小さい。つまり、「家」と「鍋」は、容量の「大なるもの」と「小なるもの」の対応であると言える。

娘が林をつくる → 娘が川をつくる

「ボヌンカヨ-88」は(1)から(8)の断章からなる。統辞的な視点によれば、ストーリーは(1)から(8)へと進行する。

系列的な視点によれば次の通りである。まず、(1)には、娘たちは日常の生活をしていたが山で男の子を拾い、その男の子と一緒に家で暮すようになった様子が描かれている。一方の(8)では、その男の子は既になくなり、娘たちだけで暮らしている。ここでは、「男の子がいる暮らし」と「男の子がいない暮らし」が対応している。

(2)には、娘の留守中に男の子が大男に変化する様子が書かれている。一方、(7)には、大男の腹からたくさんの虫たちが出てくる様子が書かれている。つまり、(2)では男の子の正体を大男の姿をした「お化け」としているのに対し、(7)では「お化け」としての大男の腹から虫たちが出ること、「お化け」が消失する。このように、ここでの対応は、「お化けの出現」と「お化けの消失」という対照的關係による。

(3)では、娘が男の子を火の中に落して殺そうとするが、むしろ男の子は大男となり、娘たちを追いかけることとなる。一方、(6)では、大男はババにより川に落され、娘たちを追いかけることができなくなる。これをまとめると次のようになる。

	(3)	(6)
落した人	娘	ババ
落した場所	火	水
落した結果	追いかける	追いかける
	追いかける	追いかける

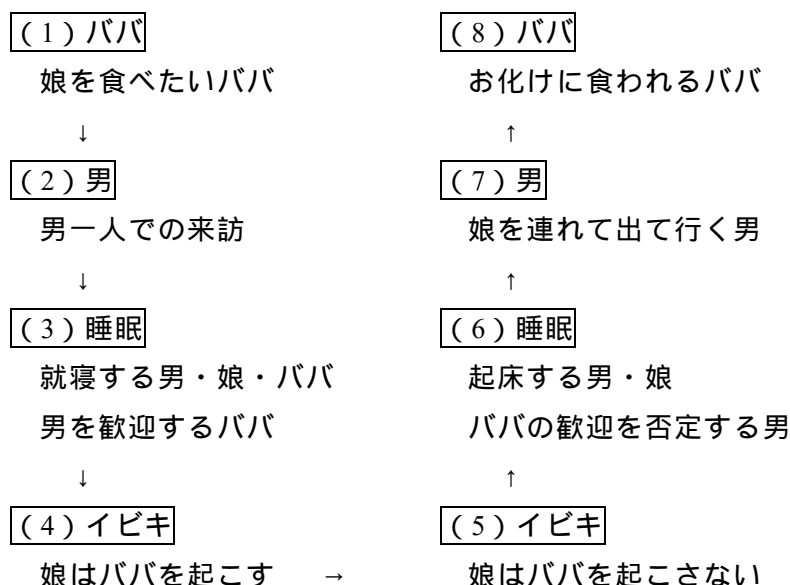
つまり、「娘」と「ババ」、「火」と「水」、「追いかける」と「追いかける」がそれぞれ対照的關係である。

(4)では、大男に追いかけられた際、姉妹たちは、櫛や玉を林に変える。一方、(5)では、末娘は櫛を川に変えている。ここでは「林」と「川」が対照的になっている²¹。

²¹三人きょうだい譚では、しばしば、末妹（もしくは末弟）が一番賢く対処する。このことについて、丹菊は次のように述べている（丹菊 2012：67-76）。「サハリンアイヌに伝承されてきた散文説話トゥイタハ tuytah には北海道アイヌとは異なる特徴がみられ、独特の話が多い。なかでも「三人きょうだい譚」は北海道に類話がみられない独特の話群である。三人兄弟あるいは三人姉妹が登場する話が多数採録されている。特定のジャンルに必ずしも限定はされないが、傾向としてはトゥイタハに多い。三人きょうだいが登場し、ある課題に二人が挑んで失敗し、最後の一人が成功する。成功する一人は能力が劣るとみなされていた者である。」この物語の場合、上の二人の姉が林をつくったのに対して、末妹は川をつくるのだが、末妹の行為は実を結ばない。ところが、この末妹の行為の後、ババは、「お化け」を川に落すことで、「お化け」を足止めさせる。このことから、末妹が川をつくった行為は、「お化け」から逃れるにふさわしい行為であったことがわかる。したがって、ここでの「林」と「川」の対応は、「陸」と「水」との対応であるが、同時に、「有効ではない行為」と「有効な行為」との対応でもある。

4.4. 「いびきの話-89」

本節では、2.4.節に示したテキスト「いびきの話-89」に付してある記号・数字に基づいた図式化を行う。



「いびきの話-89」は、(1) から (8) の断章により構成されている。統辞的視点では (1) から (8) へとストーリーが進行する。

系列的視点では以下の通りである。まず、(1) には、パパが寝言で娘の肉を食べたいと言う。そのことを娘から指摘されたパパは、お化けがそのように言ったのであって、自分はそのように言っていないと告げる。しかし、実際はパパがお化けであり、パパ自身が娘の肉を食べたがっていた。一方、(8) では、パパがお化けに食べられてしまう場面となる。つまり、パパは、食べる側から食べられる側へと転じている。

(2) には、娘の家を男が一人で訪れる場面が描かれている。この場面では、娘はパパと緊密な関係であるが、娘は男とは初見である。それに対して、(7) には、男が娘を連れて家を出る場面が描かれる。ここでは、娘はパパがお化けであることを知り、その関係は断裂している。その一方、娘は男を信頼している。

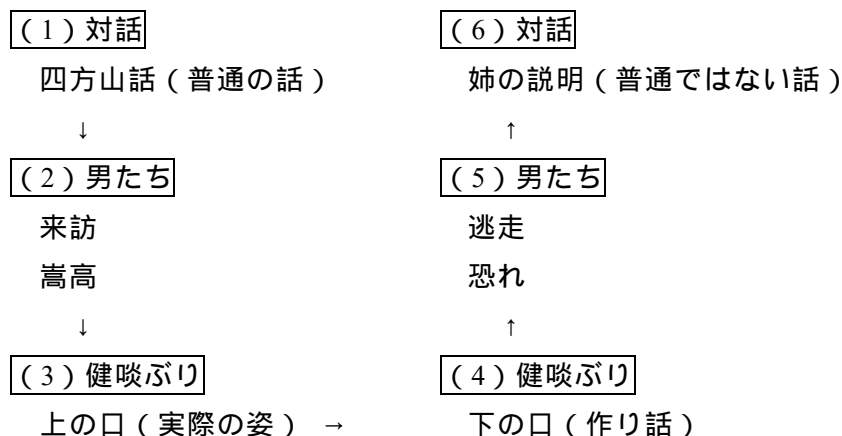
(3) には、男・娘・パパが就寝する場面が描かれている。それに対する (7) には起床の場面が描かれている。つまり (3) と (7) には、就寝と起床という対照的な出来事が配置されている。ただし、(7) で起床したのは男と娘のみ²²である。さらに、(3) には、パパが男の来訪を歓迎し、食事をふるまう場面が描かれているのだが、一方の (7) には、パパが男を歓迎する場面は描かれていない。ここでの (3) と (7) における、男がパパの歓迎を受けたことと受けなかったことは対照的な関係である。なお、(7) では、パパがお化けであることを既に認識していたため、男はパパを起こさずに、娘を連れ逃げたのであるが、これは、事

²²男はパパが「お化け」であることを見抜いたためにパパを起こさない。

実上、男がババからの歓迎を拒否したことを意味する。

4.5. 「人食いおばけ」

本節では、2.5.節のテキスト「人食いおばけ」に付された記号・数字にしたがい図式化する。



「人食いおばけ」は(1)から(6)の断章からなる。統辞的に見れば、(1)から(6)へとストーリーが進行する。

一方、系列的に見れば次のようになる。(1)には、この物語の一人称である娘と、その姉との日常が書かれており、二人は「四方山話」をしていた。一般に「四方山話」は種々雑多な世間話を指すので、二人は取り立てて特別な話題による話をしていないと思われる。一方、(6)では、二人の男が訪問してきたことにまつわる話を姉が述べている。ここでの姉の話は、自らが霊力に長けており、今回の「カワウソ」たちの訪問についても、その意図を知っていたことなど、娘にとっても「驚いたり呆れたり」する、いわば特別な話題による話であり、姉の話は日常的な出来事をテーマとしたものではない。このように、(1)と(6)には共に「対話」が描かれているものの、内容的には「日常的なもの」と「非日常的なもの」という違いがある。

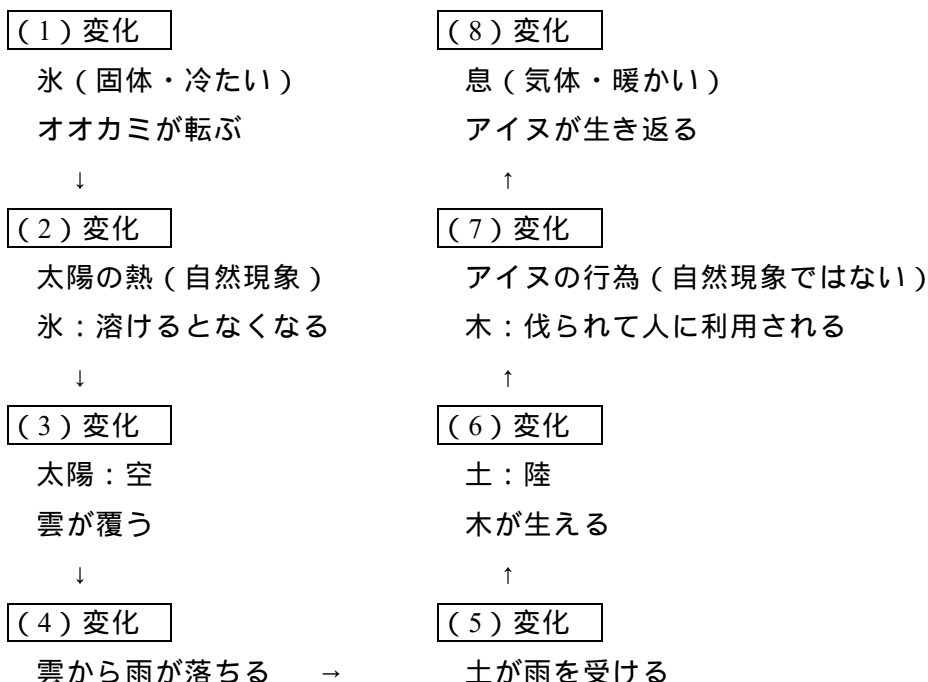
(2)には、男たちが娘たちの家を訪れる場面が描かれている。その際、娘たちは歓迎するそぶりを見せないのだが、男たちの態度は娘たちのそぶりを気にせず、むしろ嵩高な態度で娘たちに接する。一方、(5)では、男たちは、娘たちに恐れをなして遁走している。この個所では「男たち」の態度が描かれているものの、その様子は「訪問」と「逃走」、「嵩高」な態度と「恐れ」の態度と、対照的なものである。

(3)と(4)には、共に、娘たちの健啖ぶりが描かれている。しかし、(3)では「上の口」についてであり、(4)は「下の口」についてであるという相違がある。また、「上の口」の健啖ぶりは男たちが目撃した「実際の姿」であるのに対して、「下の口」の健啖ぶりは、娘の姉の「作り話」であるという違いもある。

4.6. 「氷の上で」

2.6.節のテキスト「氷の上で」に付された記号・数字にしたがって図式化を行うと以下の

ようになる。



「氷の上で」は（１）から（８）の断章により構成されている。統辞的な観点によれば、この物語は（１）から（８）へとストーリーが進む。

一方、系列的な観点によれば、以下の通りである。「氷の上で」の場合、（１）には、「オオカミ」が氷のうえで転ぶ様子があり、（８）には、「アイヌ」が死んでも息をかければ生き返ると書かれている。ここでは、オオカミが「転ぶ」とアイヌが「生き返る」ことが対比されている。「転ぶ」と「生き返る」は対照的である。また、オオカミが転ぶきっかけを作った「氷」は「固体」であり、かつ、「冷たい」ものであるのに対し、アイヌを生き返らせた「息」は「気体」であり、かつ、「暖かい」ものである。

また、（２）と（７）の場合、「氷」と「木」は共に固体であるが、「氷」は「太陽」の熱で溶けてなくなるのに対し、「木」は「アイヌ」に伐られ木材として利用される。また、双方は、「自然現象」と「自然現象ではない」ものという対比でもある。

（３）の現象は「空」での出来事である。一方の（６）は「陸」での出来事である。また、「太陽」は「雲」が覆うことで隠れるのだが、それに対して、「木」は「土」の中から生えることで表に現れる。つまり、「太陽」や「土」を隠すという点では双方は同じなのだが、「雲」は「太陽」の外側からやってきて「太陽」を覆い隠すのに対し、「木」は「土」の内側から生え出ることによって「土」を覆い隠すという点が対照的である。

（４）では、「雨」は「雲」から落ちる。一方、（５）では落ちてきた「雨」を「土」が受けている。つまり、「落ちる」と「受ける」が対照的である。

5. 結果および考察

本稿の1節に示したように、従来、裏返し構造が確認できた事例は、異郷訪問譚に限定されており、それ以外の形式による物語に裏返し構造が適用されたことを示す先行研究はなかった。これを踏まえ、本稿では、異郷訪問譚に類別できない物語に裏返し構造が使用されている事例を得ることを目的とし、いくつかのアイヌ口承テキストを題材としての検証を行った。

その際、異郷訪問譚の形式によるアイヌ口承テキストにも、従来どおり裏返し構造が見いだされることを予備的に確認した(4.1.節および4.2.節)。ここで、本稿における異郷訪問譚の定義は3節に示したものである。そのうえで、異郷訪問譚の形式によらないアイヌ口承テキストにも裏返し構造を援用した(4.3.節から4.6.節)。なお、本稿で検証した異郷訪問譚の形式によるアイヌ口承テキストは「箱流しの話」・「飢餓魔」であり、異郷訪問譚の形式によらないものは「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」である。

4.1.節および4.2.節において行った、アイヌ民族の異郷訪問譚である「箱流しの話」・「飢餓魔」に関する予備的検証によれば、「箱流しの話」と「飢餓魔」はそれぞれ5対の対応を持ち²³、かつ、後半の要素の配列順が前半とは逆になっている²⁴ので裏返し構造からなることが確認できた。これは、異郷訪問譚形式を持つアイヌ口承テキストの場合でも、他と同様、裏返し構造が使用される事例があることを示している²⁵。

以上を踏まえ、4.3.節から4.6.節では、異郷訪問譚の形式によらないアイヌ口承テキスト「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」に対して裏返し構造を援用しての分析結果を示した。それによれば、この四種類のテキストは、それぞれの物語の「前半」部分の要素と、物語の「後半」に相当する要素が対照的な関係を持つ構造からなる。これは、特徴Aを満たすものである。以下は、それぞれのテキストに見いだされた対照的な対応の個数である。

テキスト	対応の個数
ポヌンカヨ-88	4
いびきの話-89	4
人食いおばけ	3
氷の上で	4

また、4.3.節から4.6.節の図式によれば、それぞれのテキストの後半の要素の配列順が前半の逆であるので、特徴Bについても満たしている。以上より、「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」は、裏返し構造による構成である。このことより、裏返

²³これは裏返し構造の特徴Aを満たしていることを指している。

²⁴これは特徴Bを満たしていることを示している。

²⁵ここでは異郷訪問譚の形式によるアイヌ口承テキストの二例を示したに過ぎない。筆者としては、これを以て、すべての異郷訪問譚形式のアイヌ口承テキストが裏返し構造による構成であると断言するつもりはない。

し構造は、異郷訪問譚に限定的に見いだされる構造ではないことが示された。

6. 今後の課題

本稿では、異郷訪問譚の形式ではないテキストに裏返し構造の使用が確認できた事例として、アイヌ口承テキストである「ポヌンカヨ-88」・「いびきの話-89」・「人食いおばけ」・「氷の上で」の場合を示した。筆者としては、今後、アイヌ口承テキスト以外でもこのような事例が見いだせるかを確認したいと思っている。そもそも裏返し構造はどのような特徴を持つ物語に出現するのかという点は明らかになっていない。大林（1979）が提示した「異郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか」は、いまだ、今後明らかにすべき課題として残っている。

一方、アイヌ民族には、対称性を好む心性があることが知られている（例えば、切替 2007：35-56、櫻井 2012：97-104）。アイヌ民族を話者とする口頭テキスト²⁶には対句（高原 1998：27-36）や交差対句（大喜多 2012a：181-213）の使用がしばしばみとめられてきた。これは、アイヌ民族の心性に一因している²⁷。裏返し構造は、1節で示した特徴 A と特徴 B の双方を持つのだが、交差対句には、特徴 A を持たず特徴 B のみを持つ場合も含まれる²⁸。換言すれば、交差対句の対応がすべて対照的關係性によるものであるとすれば、これは裏返し構造である。

以下に示す、萱野茂²⁹の談話資料³⁰（菅 1994：45-85）に見られる構造（大喜多 2012b：127-138）のように、アイヌ民族を話者とする口頭テキストには、特徴 A を持たず特徴 B を持つ構造（つまり、裏返らない形式による交差対句）がしばしば見いだされる³¹。

萱野茂の談話資料に見られる交差対句

- A 今日の話のはじめ
- B お祝いについて
- C 今日の本題：家を建てる話
- D 柱を建てること
- E 「スコップ」で穴を掘った訳ではない
- F 「ほたて貝」を使った
- G 「ほっき貝」を使った

²⁶対句や交差対句の使用は口承文芸に限定されず、しばしば自然会話でもみとめられる。ここでは口頭テキストでの事例を示した。

²⁷対句の使用や交差対句の使用はアイヌ民族に限定されない。

²⁸筆者は大喜多（2013）で、「この「裏返し」モデルの特徴の一つは、対応する要素どうしが「同心円状」に配列しているという点であり、このことは交差対句における特徴と一致している。筆者としては、この「裏返し」モデルを修辞技法の種類として類別した場合、交差対句として位置付けられると判断している」と述べた。本稿における認識も同じである。

²⁹萱野はアイヌ語北海道方言の話者である。

³⁰この談話資料は日本語によるものである。

³¹これは、アイヌ民族による口頭テキストにしばしば見られる構造上の特徴である。

H 穴の中に手を入れてみた
I 身体を横にする
I' 身体を土の上に寝かす
H' 穴の中へ手を入れてみた
G' 「ほっき貝」で掘った
F' 「ほたて貝」で掘った
E' 「スコップ」で穴を掘った訳ではない
D' 柱を建てること
C' 今日の本題：家を建てる話
B' 新築祝いについて
A' 今日の勉強のはじめ

ここでは、前半の A から I の要素は、後半では I' から A' と、配列順が逆転するものの、それぞれの要素の意味は裏返らず、前半の要素が後半でほぼ再現される。

つまり、交差対句の使用を好むアイヌ民族の心性が、異郷訪問譚以外の形式でも裏返し構造を発現させる一因である可能性がある。この点は今後検証する予定である。

引用文献

- 大喜多 紀明 (2012a) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11 号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明 (2012b) 「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」『ポリグロシア』23 巻, 127-138, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2013) 「アイヌの子守歌 (イヨルイカ) についての考察—心性が継承される直接的なプロセス」『京都民俗』30・31 合併号, 143-158, 京都民俗学会
- 大喜多 紀明 (2014) 「アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問譚構造について—ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合—」『国語論集』11 号, 77-89, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多 紀明 (2015) 「宮崎駿のアニメーション映画『風の谷のナウシカ』および『天空の城ラピュタ』を題材としての構造分析」『北海道言語文化研究』13 号, 103-122, 北海道言語研究会
- 大林 太良 (1979) 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』2 号, 1-9, 日本口承文芸学会
- 勝俣 隆 (2009) 『異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編』和泉書院
- 加藤 泰 (1979) 「済州島の二つの神話の構造分析」『民族学研究』44 巻 1 号, 83-90, 日本民族学会
- 切替 英雄 (2007) 「アイヌの地理的認識と上 (かみ) と下 (しも)」津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』14 号, 35-56, 北海道大学大学院文学研究科
- 櫻井 義秀 (2012) 「アイヌ民族の宗教意識と文化伝承の課題」『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report その 1 (日本語版・増刷版)』, 97-104, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- 菅 泰雄 (1994) 「アイヌ語話者の日本語北海道方言談話資料」『北海学園大学人文論集』2 号, 45-85, 北海学

園大学

高原 隆 (1998) 「アイヌ民族の物語り歌による神々との交通について」『文明 21』1号, 27-36, 愛知大学国際コミュニケーション学会

田村 すず子 (1996) 「5.PON KAMUYYYKAR 小さい神謡 (掛け合い歌、口くらべ) (10) konru ka ta 氷の上で 貝沢こきん」『アイヌ語音声資料選集：韻文篇』, 48-51, 早稲田大学語学教育研究所

丹菊 逸治 (2012) 「サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説：ニヴフ民族の「三人の漁師」からの影響」『口承文芸研究』35号, 67-76, 日本口承文芸学会

知里 真志保 (1981) 『アイヌ民譚集—えぞおばけ列伝・付』岩波文庫

依田 千百子 (1982) 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』5号, 47-57, 日本口承文芸学会

Pop, Mihai (1990). Coordonate structurale ale folclorului literar, in Pop, Mihai & Ruxăndoiu, Pavel (eds.), Folclor literar românesc (pp.77-92). Editura Didactică și Pedagogică.

執筆者紹介

氏名：大喜多 紀明

所属：京都民俗学会 会員

Email：ohkitan@yahoo.co.jp